2022 年 10 月 22 日　茨城県潮来市にて
第 5 回水循環シンポジウム「水郷の暮らしと水循環シンポジウム」を開催しました

午前：現地見学会（島崎城跡大井戸と上戸不動の井）　午後：シンポジウム（於　潮来ホテル）

現地見学会報告

＜島崎城跡大井戸＞

島崎城が存在していた頃（鎌倉時代～戦国時代）、大井戸はどのような役割を果たしていたか、島崎城跡を守る会山口会長による挨拶の後、長谷川副会長より説明を頂きました。

また、なぜ、山城の中腹（標高 20m 程）に水が湧いたのか、湧水の仕組みや島崎城の地質について、露頭を見学者に観察してもらいながら、当 NPO 専門会員の風岡氏が説明しました。

見晴らしの良い西ニの曲輪にも足を運び、かつて香取の海であった水郷地帯の田園風景を臨み、いかにこの地が島崎城築城に適していたか、地質、地形の両方から考察しました。

島崎城跡を守る会の方々によって整備された大井戸。
見学者の安全のため、現在は埋め戻されています。

島崎城跡を守る会　山口会長から会の紹介のほか
島崎城の歴史についても説明を頂きました。

大井戸の説明をする島崎城跡を守る会　長谷川副会長。山城でどのように水を確保していたか、島崎城が存在した当時の人々の暮らしを推測しました。

大井戸付近で見られる硬い砂層の露頭。
当 NPO 専門会員の風岡氏が島崎城跡の地質の特徴と
湧水の仕組みについて説明しました。

常総粘土層の露頭前で説明。
参加者たちは興味深げに露頭を観察していました。

島崎城跡一番の見晴らしを誇る西二の曲輪で
長谷川副会長より説明を受けました。

西二の曲輪からの眺望（写真は 2021 年 9 月撮影のもの）
中央の小高い山が島崎城の西出城跡。
かつては島崎城の麓まで香取の海が広がっていたそうです。

昨年の第 4 回水循環シンポジウム「香澄の郷・水循環シンポジウム」では島崎城跡の現地見学会を予定していましたが、新型コロナウイルスの急激な感染拡大を受けて、誌上開催となりました。

今回は島崎城跡を守る会のご協力の下、1 年越しで島崎城跡での現地見学会が実現しました。

＜上戸不動の井＞

島崎城跡から１km程離れた潮来市の上戸（うわど）地区の台地の中腹にある湧水です。現在は砂層の隙間に通された塩ビ管から湧水が御手洗に注がれています。昭和 40 年代～50 年代頃、砂層の崩壊が進んだため、塩ビ管が通されましたが、それ以前は不動の井の隣の洞穴内の縁を通って、湧水が流れていたそうです。奥行 2.5m 程の洞穴の入り口には 1741 年建立の不動明王像が祀られています。

水道敷設や井戸の設置が進み、この湧水が生活用水に使われることは無くなりましたが、長い歴史のある不動の井は今でも地域の方々によって保全されています。

見学会では、お不動様のご縁日である毎月 28 日に保全活動をされる「お茶まじ会」の取り組みや、近隣の方から伺ったかつての不動の井の利用状況を当 NPO 会員の山田氏が説明しました。

また、古関東深海盆ジオパーク推進協議会で行った、近隣の土地での簡易ボーリングの試料を展示して、この地域で湧水が生まれるメカニズムについて当 NPO 会員の布施氏が説明しました。

上戸不動の井の湧水と洞穴の入り口に祀られた不動明王像の祠。「お茶まじ会」の方々によって季節の花々が供えられています。

色別標高図を用いて、上戸不動の井周辺の地形と湧水の仕組みを NPO 会員の布施氏が説明しました。

簡易ボーリングの試料を観察。湧水の仕組みや近隣の地形について参加者からも多くの意見が交わされました。
また「お茶まじ会」の方々もご参加下さいました。（写真右 3 名）

見学地へは潮来ホテルのマイクロバスで移動

水循環シンポジウム報告

午後は潮来ホテル平安の間にて水循環シンポジウムが開催されました。

潮来市長様から寄せられた開催の辞のご紹介の後、当 NPO 髙嶋理事長が趣旨説明を行い、「これまで日本では、循環する水が様々な所轄庁で各々の法律により管理されていたが、平成 26 年の水循環基本法の制定により、バラバラに存在していた水関連法を理念で取りまとめられるようになった。さらに令和 3 年には水循環基本法が改正され、これまで法整備されてこなかった地下水について、『国や地方自治体は地下水を適正に保全し、利用する責務がある』と明示された。今後は地域の現状に合った地下水マネジメントの推進が望まれる。」と講演しました。また「地下水を地域の財産として保全してきた潮来市は、今後の地下水マネジメントの手本となりうるポテンシャルが有る」と潮来市での湧水保全の取り組みに期待を寄せました。更に第 3 回水循環シンポジウム「大生の七井戸水循環シンポジウム」で採択された潮来湧水宣言の内容を再確認しました。

基調講演は創価大学の宮崎淳先生にご講演いただく予定でしたが、体調不良でやむなく欠席されたため、髙嶋理事長が代読しました。基調講演では、第 5 回シンポジウムのテーマである「流れる水は誰のもの？」との問いかけに、地下水の取り扱いを法律の観点から考えていきました。そして、「『地域の水は地域で守る』という意識を高めていくことが大事」と論じられました。

午後の水循環シンポジウムの会場
潮来ホテルの外観

髙嶋理事長による趣旨説明と基調講演

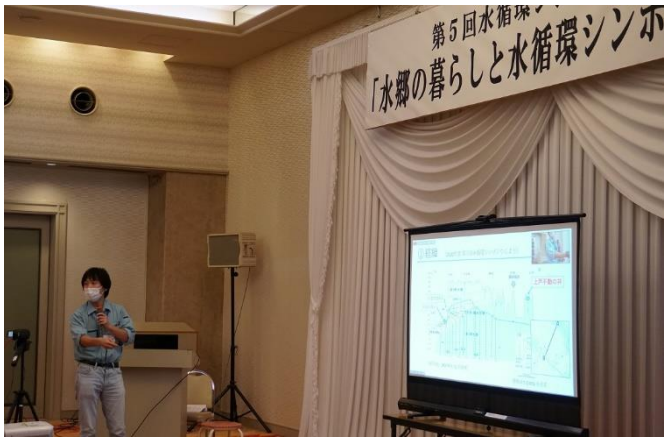
シンポジウム後半は、島崎城跡を守る会の長谷川副会長と当 NPO 会員の布施氏及び専門会員の風岡氏による講演でした。長谷川副会長は茨城県水郷県民の森の中にある大膳池を取り上げ、「大膳池は水戸藩だった頃に造られた溜め池で、山に降った雨水が山林に蓄えられ、山肌からじわじわと染み出してきた絞り水が溜まったものと考えられる。透明度のある溜め池の水が、今後も生活排水の混入やレジャー施設化で汚染されないように願う。」と述べました。また、潮来市に長く在住した経験から、利根川や北浦の水質汚濁などの問題点を指摘され、「水の再生には緑を守ることが重要。」と訴えました。

布施氏と風岡氏は、午前中の現地見学会で巡った島崎城跡、上戸不動の井、またこれら近隣（潮来市中西部）の地質と地下水について、統括的な観点で講演しました。その中で、過去の研究データと今回の地質調査の結果を比較し、第 3 回シンポジウムで焦点を当てた大生地区と潮来市中西部では地質が異なり、湧水の機構も異なると説明しました。また、島崎城が存在していたころの大井戸、上戸不動の井の湧水が、地域の人々の共有財産という認識の中で保全されてきたことを再確認しました。

大膳池をはじめ「水の再生には緑を守るこが重要」
と話す島崎城跡を守る会長谷川副会長

透明度が保たれている大膳池
（写真は第 5 回水循環シンポジウム冊子より引用）

潮来市中西部の地質と地下水について講演する当 NPO 会員の布施氏（写真左）と当 NPO 専門会員の風岡氏（写真右）。上戸不動の井と島崎城跡周辺の地下水流動の考察を通し、「地下水は長い地球の歴史的産物。地下水が地表に流れ出た湧水は、地域の人々の共有財産。」とまとめました。



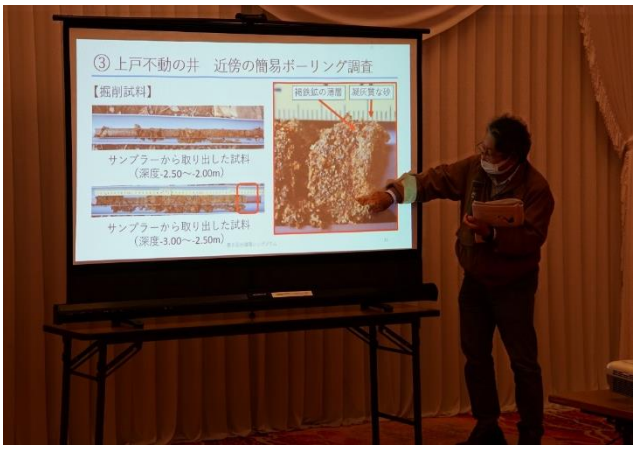
大生の思井戸と上戸不動の井とでは、
湧水の仕組みが違うのだとか。

講演に熱心に耳を傾ける参加者の皆さん

講演後の質疑応答、総合討論では、上戸の難透水層を形成する凝灰質な砂層についての議論の他、趣旨説明の中で触れられた潮来市の古地形の考察についても議論がなされました。

最後に髙嶋理事長がこれまで潮来市で開催された 3 回の水循環シンポジウム（うち 1 回は誌上開催）の総括として「大生の七井戸、島崎城の大井戸、上戸不動の井の保全の取り組みは、まさに『流れる水はみんなのもの』という認識が地域の方々に有ったことを物語っています。潮来市の方々が古の時代から代々受け継いできた地域の共同井戸の保全活動に見られる住民合意こそ、日本の慣習であり、今後、各地で実施が期待される地下水マネジメントの根幹となる考え方ではないでしょうか。」と結びました。

参加者からは潮来市の古地形や地質についても質問が寄せられ、講演者と活発な意見交換がされました。



簡易ボーリングの試料写真を用いて、
上戸不動の井の難透水層と考えられる
凝灰質な砂層の説明をする当 NPO 専門会員の風岡氏。

現地見学会説明者・シンポジウム講演者全員で
記念撮影